

# 「間主観性」再考

## －日本語の「そういえば」をケーススタディに

山田彬堯 東京大学[院]

### 〈要旨〉

本稿の目的は、歴史語用論の中で提唱されてきた「間主観」という概念を批判的に検討することである。これまで Traugott (1982, 2003, 2010)を中心に、「客観的な意味>主観的な意味>間主観的な意味」という傾向が言語表現の意味変化に見られるとされてきた。(Traugott and Dasher, 2002; 高田・椎名・小野寺, 2011) だが、「そういえば」という表現を事例に、客観性の強い意味からでも、間主観化が見られることを指摘し、主観化と間主観化は、別の軸に存在する変化である可能性を指摘する。

## 1 インTRODクシヨN

### (1) 主張

- a. **先行研究**: 「客観的な意味>主観的な意味>間主観的な意味」Traugott (1982, 2003, 2010; Traugott and Dasher, 2002; 高田・椎名・小野寺, 2011)
- b. **本稿の主張**: 客観性の強い意味からでも、間主観化が見られることを指摘し、主観化と間主観化は、別の軸に存在する変化である可能性を指摘する。

### (2) 意義

- a. **言語表現の意味・機能**: 「間主観化」という概念を組上に載せることは、言語表現の意味・機能に影響を及ぼす諸要因を詳らかにする上で有効。
- b. **ミクロレベルの考察**: 通時的な広い視野で言語の意味変化を捉えてきた先行研究に対しそのメカニズムの詳細を豊富な用例に即した細やかな考察で補う。

## 2 間主観性と構文

### 2.1 間主観性

#### (3) 用語整理 *Intersubjectivity* (Traugott 2003, 強調引用者)

To adapt Lyons's words about subjectivity, intersubjectivity in my view refers to the way in which natural languages in their normal manner of operation, provide for the locutionary agent's expression of his or her awareness of the addressee's attitudes and beliefs, *most especially* their "face" or "self-image"

- (4) Verhagen (2005): *intersubjectivity*, Nuyts (2001, 2005); Cornillie (2004): *intersubjectivity*, Halliday and Hasan (1976): *textual*, Fitzmaurice (2004): *interactive*, Langacker (2008): *intersubjectivity*

(5) 小野寺 (2011: 75)

「要点をまとめるならば、主観化とは、もともと単に客観的な意味を示していた語が、語が用いられる歴史の中で、次第に話者自身の主観的判断・観点・意味をあらわすようになる意味の発達のことである。問主観化とは、主観化を基盤にして、さらにコミュニケーション(相互作用)の中で用いられる機能・意味を帯びていく変遷を指す」

## 2.2 構文性

(6) **構文のゲシュタルト性**： 部分的合成性、構文スキーマ

- a. **山梨 (2009: 131)**： 「基本的に、合成構造は、部分の総和からは単純に予測できない独自のゲシュタルト的な性質をもっている。この点で、合成の認知プロセスは、厳密には部分的合成性 (partial compositionality) の性質をになうプロセスである。」
- b. 例： mill (山梨 2009: 26)
  - i. cotton mill/ flour mill/ paper mill/ steel mill
  - ii. watermill/ windmill
- c. **Langacker (2008)**: 「jar lid (合成構造) の形式と意味を、jar と lid (成分構造) から予測することはできるだろうか。この問いの答えは、何を予測の根拠として見なすかによって変化する。合成は加算以上のものであるため、成分構造のみに注目するのは不十分である。予測の根拠には、慣習としてすでに定着している合成パターンも含める必要がある。したがって、合成性は、合成構造が構文スキーマに基づいて成分構造から形成されているか、という観点から説明される必要があるだろう」 (ibid. 213)

## 3 「そういえば」

### 3.1 「そういえば」と主観性・構文性

(7) 構文性のチェック：

- a. 追加：○副詞をつけることができない
- b. 置換：○謙譲語、尊敬語にできない
- c. 合成：○誰も何も言っていないところで使える
- d. 頻度：○高頻度

(8) 客観的表現1 「そういえば」：

- a. Form: /sooieba/  
Meaning: [「そう」が指示する内容]を言えば
- b. 構文性(低)：追加(×)置換(×)合成(×)頻度(○)
- c. カルトンって言います。事務用品を扱っているお店ならそういえば通じるはずです。(OC08\_00611)

(9) 客観的表現2：「そういえば+ソ系 …」

- a. Form: /sooieba soo(da/ne/ka …)/  
Function: 同意
- b. 構文性(中程度)：追加(○)置換(×)合成(×)頻度(○)
- c. 「昼時だったのに、人の気配がまるでしねえ」サクラは、その言葉に眉根を寄せた。「そういえば、そんな気も…」 (LBt9\_00138)

- (10) 主観的表現1：「そういえば（思い出し）」
- Form: /sooieba /  
Function: 話者が何かを思い出していることを表出する
  - 構文性（高）：追加（○）置換（○）合成（○）頻度（○）
  - いくつものプロジェクトの指揮を執り、報告書に追われていた姿が印象に残っている。ミランダはこめかみを揉み、もっと細かい記憶を拾いあげようとした。そう言えば、あの時期、ジョンは体調を崩していたのではなかっただろうか？（PB49\_00179）

- (11) 主観的表現2：「そういえば（気づき）」
- Form: /sooieba /  
Function: 話者が何かに気づいたことを表出する
  - 構文性（高）：追加（○）置換（○）合成（○）頻度（○）
  - 「救けて」と声が出た。その余韻が消えると、コツコツいう音が残った。聞き違いではない。窓がたてる音だ。そういえば、陽が翳っている。そちらへ顔を向け、知沙は息を呑んだ。（PB29\_00423）

- (12) 考察：「そういえば」は、以下の多様性を持つ
- 構文化する範囲**：「そういえば」だけでゲシュタルトを形成するのか、隣接表現とともに構文としての意味をコード化されているか
  - 定型表現性**：どれだけ固定化している表現なのか
  - 主観性**：合成性の生きた客観的意味なのか、話者の内的心情を吐露する主観的意味なのか

### 3.2 「そういえば」と間主観性

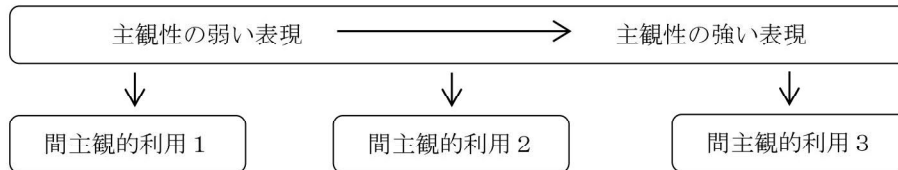
- (13) 主観性の高い表現の間主観的利用：
- 「そういえば」父は朝刊を開きながら、その縁越しにシリーニをじろりと見た。「おまえ、ゆうべは帰りが遅かったな」（PB59\_00701）
  - 「おお、パーシー、君、監督生になったのかい？」双子の一人がわざと驚いたように言った。「そう言ってくれればいいのに。知らなかったじゃないか」「さてよ、そういえば、なんか以前に一回、そんなことを言ってたな」ともう一人の双子。「二回かな…」「一分間に一、二回かな…」「夏中言っていたような…」（OB5X\_00154）

- (14) **主観性の低い表現の間主観的利用**：  
「欲しいとか欲しくないという問題ではないの。愛の証拠として確保しておきたいだけなの。人間、一寸先は闇よ。明日なにか起きるか、だれもわからないわ」「そう言えばそうだが、どうして急に」（PB59\_00643）

- (15) 間主観性による構文スキーマ（離脱性と修復）：
- Form: souieba, [ A ] [ B ] .  
Meaning: [ A ]: B を述べるための発話行為に関する前提  
[ B ]: 新しい話題の導出  
Function: トピック・シフト

- b. 最近、急激に肩こりが酷くなったので病院に行ってレントゲンを撮ったら、姿勢がかなり左側に傾いてました。まっすぐしているつもりだったのに…と思っていたけど、そういえば7年ほど前から一日中P Cの前で仕事をするようになったのですが、モニターの前にまっすぐキーボードを置くとテンキーの部分があるので、キーを打つのに少し左に傾いていることに気づきました。(OC09\_10775)
- c. すると角川さんが、俺にこういった。「そういえば、君は歌を歌ってるんだよね。じゃあ主題歌もやってみない？」(LBp7\_00068)

### 3.3 まとめ



## 4 結論

### (16) 間主観性：

- a. 間主観性は、新しい言語〈構文〉を生み出す。
- b. 間主観性の本質として〈戦略性〉が存在する

### (17) 主観性表現から間主観性表現へ

- a. 主観性表現は、自己を潜在的に語る表現
- b. 間主観性の持つ〈戦略性〉が主観性表現の自己演出性を利用する

**参考文献** Comillie, Bert (2004) Evidentiality and Epistemic Modality in Spanish (Semi-) Auxiliaries: A Functional-pragmatic and Cognitive linguistic Account. PhD. Dissertation. Katholieke Universiteit Leuven./Fitzmaurice, Susan (2000) Coalitions and the Investigation of Social Influence in Linguistic History. *European Journal of English Studies*, 4:3, 265-276./Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press./Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan (1976) *Cohesion in English*. London: Longman./Langacker (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. [山梨正明 (監訳) (2011) 『認知文法論序説』東京：研究社] /Nuyts, Jan (2001) *Epistemic Modality, Language and Conceptualization*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins./Nuyts, Jan (2005) *Modality: Overview and linguistic issues*. In *The Expression of Modality*, William Frawley (ed.), 1-26. Berlin/New York: Mouton de Gruyter./Traugott, Elizabeth Closs (1982) From propositional to textual and expressive meanings: Some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In *Perspectives on Historical Linguistics*, Winfred P. Lehmann and Yakov Malkiel (eds.), 245-271. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins./Traugott, Elizabeth Closs (1989) On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change. *Language* 65, 31-55.Traugott, Elizabeth Closs (2003) From subjectification to intersubjectification. In *Motives for Language Change*, Raymond Hickey (ed.), 124-139. Cambridge: CUP./Traugott, Elizabeth Closs (2010) (Inter)subjectivity and (inter)subjectification: A reassessment. In *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, Kristin Davidae, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens (eds.), 29-71. Berlin/New York: Mouton de Gruyter./Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: CUP./小野寺典子 (2011) 「談話標識 (ディスコースマーカー) の歴史的発達—英日語に見られる (間) 主観化」『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) 大修館書店, 73-90./高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) (2011) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店./トロウゴット, エリザベス・クロス [訳 福元広二] (2011) 「文法化と (間) 主観化」『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) 大修館書店, 59-70./Verhagen, Arie (2005) *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*. Oxford: Oxford University Press./山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』大修館書店。